

令和3年3月1日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

# 花の木古墳群・花の木遺跡発掘だより

## No.10



### ◎発掘調査もラストスパート

発掘調査期間もあと一月を切って佳境に入りました。

2号墳も周溝を完掘して全体像が明らかになりました。調査の主体は下層の弥生時代の集落の調査へ移っています。単独の遺構もあれば、いくつもの遺構が重なり合った遺構があったりと、さまざまな遺構の発掘調査を行っています。

竪穴建物は新たに10棟以上見つかっています。その中には様々な種類の遺物が出土している竪穴建物もありました。ある竪穴建物では少し変わった遺物が出土しています。右の写真の○で囲った遺物で、これはミニチュア土器と言うお祭りで使われたとされる遺物です。横には高坏などが出土しており、お供えをしていたのかもしれませんが。



○で囲った遺物がミニチュア土器

## ◎炊事場の変遷

今のキッチンではIHやガスのコンロで煮炊きをしますが、昭和の前半期はカマドもまだ一般的でした。竪穴建物に住んでいた時代はどこで煮炊きをしていたのでしょうか。

定住化の始まった縄文時代には建物の床の中央付近で火が焚かれました。そのまま火が焚かれることも多いですが、火が焚かれる周りを石で囲った石囲炉（いしがこいろ）や、土器を埋設した炉が見られます。設楽町の設楽ダム関連遺跡でも多くの石囲炉を持った竪穴建物が見つかっています。

建物の床の中央付近で火が焚かれるのは弥生時代になっても続きます。



石囲炉

川向東貝津遺跡：設楽町  
縄文時代中期



弥生時代では石囲炉は数が少なく、多くの場合は地床炉（じしょうろ）と呼ばれるそのまま地面で火が焚かれるものです。炉の位置は入口の反対側へ中央からずれていきます。

古墳時代中期になると竪穴建物の外に煙突を設けたカマドが壁際に造られるようになります。建物内に設けられた焚口からトンネル状の煙道（えんどう）を介して外に煙を逃がしていたようです。

カマドは竪穴建物から住居の形が変化する中で構造を変化させながらつい最近まで使用され続けました。



地床炉

花の木遺跡  
弥生時代後期



カマド

境川遺跡：豊橋市  
飛鳥白鳳時代



～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

委託者：愛知県埋蔵文化財センター TEL：0567-67-4163（担当：早野、社本）

ホームページ <http://www.maibun.com/>

受託者：安西工業株式会社

名古屋支店 TEL：052-769-6500

現場代理人 TEL：090-3704-3565（中谷）